



黄昏の丘

川崎ゆきお

黄昏時、黄昏ている人がいる。その年齢も黄昏ている。だからミスマッチではなく、黄昏時には風景と同化している。

そこへ年齢的には黄昏をとっくに過ぎ、とっぴり夜に入っている老人が現れた。若い方の黄昏人よりも恰幅がよく、身なりも良い。

道ばたでポツンと黄昏れているわけには行かないので、二人とも黄昏やすい黄昏の丘にいる。黄昏なので、朝日ではだめだ。夕日に限る。しかも鮮やかな夕焼けではなく、地味な色目で、日が没した後の僅かな残り火のような紅色がいい。もう夜の暗闇が空を覆いつつあり、数十分で紅も消えるような。

黄昏の丘なので夕日専門で、東の空は高い斜面のため、よく見えない。

「堀川君じゃないか」老人が先に見つけ、声を掛ける。その中年男、もう五十を超えている。その後ろ姿だけで、老人は分かったようだ。

「先輩も黄昏ですか」

「それはもうとっくに終わり、闇夜だよ」

「そうですか。最近お見かけしないので」

「ああ、フェードアウトだ。じわじわとな」

「そうでしたか」

「君はまだやっているようだね。たまに名前を見るよ」

「はい、もうこの年なので、名の残るような仕事をやってますが」

「超ベテランだからねえ、君も。声をかけてくれる人が少なくなったろ」

「体力的にはまだまだいけるのですが」

「昔は、何処に行っても、君の姿を見つけたよ」

「あれは、若い頃です」

「使いやすかった」

「はい、先輩には何度もお世話になりました」

「古い言い方だが、老兵は去るだ。仕事がないので、しょんぼりしていたのかね」

「あ、はい」

「企画は出してますか」

「はい、いろいろと」

「でも、通らない」

「はい」

「ふつうだよ」

「ふつう」

「うん、私もそうだった」

「寂しい話ですねえ」

「今度、勝負に出て負ければ、もう遠のいた方がいいよ」

「勝負ですか」

「最後の勝負だ」

「そうですねえ、仕事がなくなれば、転職するしかないですから」

黄昏の丘は横に長く続いており、少し間隔を空けて、黄昏人達が横並びの数珠繋がりとなって座っている。

この二人のように会話組もあれば、おひとり様もいる。席があるわけではないが、早い目に来ないと、満席になるようだ。

了